植物図鑑

文人墨客が描いた世界

詩文や書画などの風雅の道に携わる人を文人墨客と呼びます。蘭・竹・梅・菊が四君子と呼ばれ、君子の徳を体現したものとして大切にされてきたように、彼らは植物を愛し、植物の存在に意味を見出し、好んでその姿を描きました。

本展では、近世近代の文人墨客が描いた植物画を取り上げます。彼らは、自然の植物の中に何を見出し、どのように表現しようとしたのか。作品に向きあいながら、それを探ってみましょう。

※前期と後期で作品を総入れ替えします。

【展示構成】

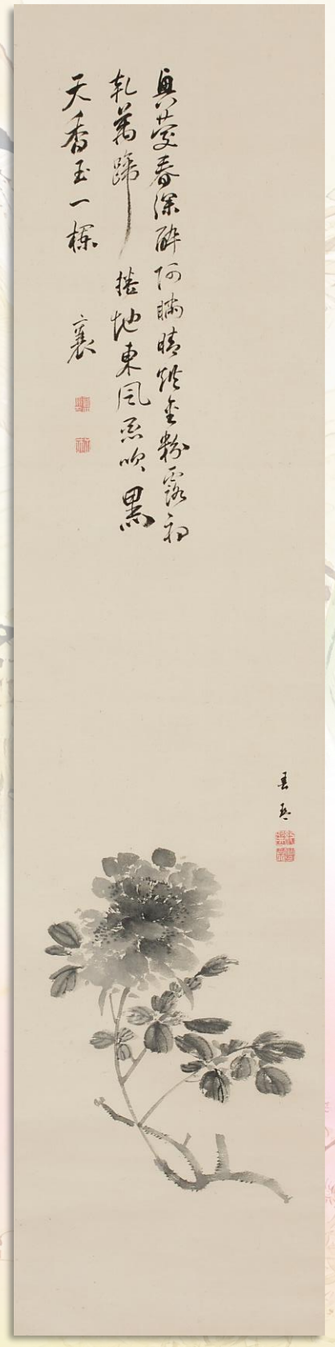
第一章　四君子を描く

第二章　様々な植物を描く

第三章　自然美を求めて

―花卉草虫と翎毛（れいもう）を描く―

桃花鴛鴦図　佐藤紫煙筆（前期展示）
個人蔵



墨牡丹図　浦上春琴筆・頼山陽賛
（前期展示）個人蔵（当館寄託）

牡丹は、「富貴」「国色天香」「花王」などと呼ばれる高貴で華麗な花です。

頼山陽の画賛詩には「悪」「黒」といった、“似つかわしくない”字が使われています。なぜでしょうか？展示室で答えを探してみてください。

墨竹図　大鵬正鯤筆（前期展示）
竹原・春風館蔵

大鵬正鯤（1691～1774）中国泉州（福建省）出身の黄檗宗の僧侶。享保７年（1722）に来日し、のちに万福寺の住持となった人物。墨竹図を得意としました。竹の生命力を墨の濃淡と冴えた線で見事に表現しています。

秋園佳色図　河邊青蘭筆
（後期展示）　個人蔵

菊花の蝶図　岡岷山筆
（前期展示）　当館蔵

菊竹図　松林桂月筆
（後期展示）　個人蔵